

## JAG ガーデンフォーラム

### 第一期『ガーデンデザインの源流を探る』

～近代（1920～30年代）住宅庭園の再発見

### 第一回『モダン都市東京のガーデンデザイン』

－1920年代の東京と庭－

2003年10月8日 会場：明治神宮外苑内「日本青年館」

司会 JAG ガーデンフォーラム第一期、第一回を開催いたします。

開会に先立ちまして、JAG 会長の正木よりご挨拶させていただきます。

正木 こんにちは。JAG 会長の正木です。

きょうはお忙しいなか、第一回のフォーラムに出席いただきまして、どうもありがとうございます。この企画自体は以前からずっと考えていたこともあるのですが、本格的なセミナーをやるのが実は初めてでして、JAG も、二年目に入ったわけですが、それぞれの活動はだいぶ活発になってきてますが、JAG としてこういう形で本格的に取り組むフォーラムは、ある意味を持たせようと思っていまして、たぶん8回が終わった時点でかなりはっきりした方向が見えるんじゃないかと思えます。たとえばガーデンデザイナーが世の中に認められるためにいろんな資格制度とかそういうことも将来的には考えていかなきゃいけない。しかし安易にそういう資格制度をつくるんじゃなくて、もっと自分たちの足元を見つめて、もっと長い歴史とかそういうなかから見出されるものとして、こういう勉強会を基本にして、繋がっていけばいいんじゃないかなと思っています。

われわれの経験したガーデニング・ブームは、1996年以後ですか、どちらかというメディアを中心として広がったような感じがありますが、もともと社会的な意味というのはかなり大きいとは思いますが、われわれがいまガーデンデザイナーというふうに呼ばれるようになって、あんまり時間はたっていない部分もありますし、それぞれの出身とか、出所が違うとかいうか、共有しているものをもう一度再認識してみたいなという意味合いもありました。私ごとですけど、2000年の東京ガーデンショー、というのはこの外苑のいまの野球場ですか、あそこで行なわれまして、初めてガーデンデザイナー、12人ぐらいが集まって「心の中の鎌倉」というテーマで開催されました。それがすごくぼくらにとっても意義深いものであったし、第一回でとまったままなのですが、屋外のガーデンショーとしてやった画期的な歴史を刻んだ部分ではあったと思っています。その当時からバラバラに活動していたガーデンデザイナーが一つの団体を持つというのは、夢でもあったんですが、JAG という団体が設立され、それがようやく2年目を迎えて、そこでこういう会を、フォーラムをやるというのはすごく意味があるんじゃないかと思えます。

それに1920年というのは、ぼくらもあまり認識がなかったのですが、第一回のガーデンのブームとっていいのかわかりませんが、その辺の源流を探ることによって、次に来る時代というか、それをもう少し明確にしてみたらどうだろうか。それはある面では、ぼくらは歴史をつくりつつあるんじゃないかと思うのですが、その表面的な意味以上に自分たちがこれから歴史のなかにガーデンというか、庭づくりとか環境、そういうものが、もう少し明確に日常的な活動のなかに落とし込んでいくためにも、歴史をもう一度振り返るといふのは大きな意味があるんじゃないかなというふうに思っています。

ぼく自身もガーデンデザイナーになるきっかけになったなかで、若い頃やった雑木林の庭という流れを、ある一部しか知らないでいたわけですが、雑木林の庭という流れの川からここにガーデンデザイナーにたどり着いているということがいえるのではないかと思います。それぞれ皆さんの持っているものや違う部分、それがいま集まって大きな川の流れになるかと思えます。8回終わったときに、改めて全体でいろんな交流会を含めてやればと思っています。

今回の第一回目の講師は、JAGのメンバーでもある須長さんで、1920年代の流れの概要というか、入り口の部分をまず口火を切って講演していただくこととなりますので、よろしくお願いします。皆さんには最後まで期待を持って聞いてください。

司会 ありがとうございます。では、第一回、第一部の講演、『モダン都市東京のガーデンデザイン』－1920年代の東京と庭－を始めます。講師は須長一繁さんです。

須長 皆さんこんばんは。いま会長の正木さんから話がありましたように、JAGとしては初めて本格的なこうしたセミナーを行ないます。その第一回目のセミナーとして、歴史的なことをもう一度振り返っておこうと、そういうことで今回の企画ができています。御案内のなかには、きょうを一回目としまして、二回目に東京農業大学の服部先生から『西洋庭園の日本的展開』というようなテーマでお話をさせていただきます。これは直接的に1920年代というよりも、20年代の前段といいますか、明治から大正にかけての頃の西洋庭園、これについてお話をさせていただこうと。

続いて三回目として、『近代の庭園とデザイナーたち』というテーマです。これも東京農業大学の鈴木先生にお話をいただきますが、1920年代、この時代にどんな人がどんな作品をつくっていたのか、人の顔が見える、やはりそういうことは非常に重要だと思います。われわれの大先輩たちになるわけですが、そういった先輩たちがどのような作品をつくってきたのかというのを、鈴木先生のお話で確認をしていきたいと思えます。

そして第四回目ですが、これは題名だけではわかりずらいかもしれませんが『茶と美術の環境としての庭園』というテーマです。1920年代を、そして庭、あるいは建築を理解するためには当時盛んになっていたお茶の文化というのが重要なわけですね。このお茶というのが理解できないと実はこの時代の日本庭園というのは、はっきりとはわからない。

形しかわからないということになります。そういうことで、熊倉先生には近代茶道史の研究、そういうところから当時の財界の茶人たちの研究成果をお聞きしたいと思います。

五回目、これは先ほど会長の話にもありましたように『雑木の庭』ですね。雑木の庭というのはいま和風の庭をつくと必ずといっていいほど雑木を主体にした庭をつくるわけです。この雑木の庭というのも実は1920年代に発達をしました。ただしこれもいま申し上げたように、単に雑木の庭があったのではなくて、雑木をつかった数寄屋の庭です。ですからここでもやはりお茶というのは関係してきます。ですから、その前の回にお茶の話というのは、実はここに繋がってくるということで、まあそういう関連で見ていただければと思います。

それから第六回ですが、『近代住宅建築と庭園』というテーマですね。庭というのは建物のスタイル、あるいはその間取り、そういうものと密接に関連をしております。そういう意味で当時の洋風住宅、これを見てみよう。洋風住宅のなかで、内田先生は特にアメリカ屋というある意味では日本で最初のハウスメーカーといってもいいかもしれません。このアメリカ屋の研究をされている方ですね。バンガローハウスというような言い方もありますけれども、そういうアメリカの洋風の住宅、そのなかから庭というのを見ていこうということになっております。

そして七回目になりますが、これは『郊外住宅地の街並みと庭園』ということですね。これはここでいいます庭園というのは、普通一般にいいます庭園という意味よりもやや意味を広げております。たとえばいまわれわれが仮に新しい住宅地を計画する。あるいは見に行くということを考えたときに、街並みというキーワードが非常に重要になります。この街並みというものが旧市街の古い街並みではなくて、新たに計画してつくられた街並み、このなかで門回りから生け垣、あるいは宅地の緑というのが非常に重要な役割を果たしております。たとえば田園調布にしろ、成城にしろ、常盤台にしろ、こういうところの研究というのは実は建築ですとか、都市計画においては盛んにされております。でも考えてみると、たとえば片一方で都市計画的にランドプランがされる。その善し悪しという議論がされているわけですね。さらにそこに住宅という建物、これも様々な研究があります。でも考えてみて、じゃあ宅地があつて、道路があつて、建物があれば街並みができるかということですよ。ここにやはり外構植栽というような、われわれが関わる分野が本来あるわけです。ところが実はこの部分はまったく語られていない。ある意味では一方的に建築、都市計画の分野でしかこの街並みということは語られていない。このあたりを藤谷先生にお話をさせていただこうということになっております。ですから、第七回目については、いわゆる私邸という庭のメインの部分というよりも、道路に面したフロントガーデンといえますか、そういうところを中心にお話をさせていただこうというように考えております。

きょう第一回目のお話ということで、いま申し上げたような7回、今回を除きますと6回のそれぞれの個々のテーマがどういう形でガーデン、あるいは住宅の庭に関わってくるのか、そのあたりを概論的な形になりますけれどもお話をさせていただいて、次回からよ

り具体的な、個々のテーマについて突っ込んだ話を進めていきたいというふうに思っております。まあそういうことでございますので、今回のお話は個々のテーマに深く入り込んでお話をするという余裕がちょっとございませんが、そのあたりはご勘弁をいただきたいというふうに思います。

レジメにもありますように、一番目に1920年代の東京ということで、題をつけております。1920年代というのは、日本が農業社会から工業社会に転換をしていく、きっかけの年ということになります。なんで日本が工業的にそれほど発達したかということを考えますと、実は第一次世界大戦というのがあります。この第一次世界大戦というのはヨーロッパを中心にした戦争ということで、日本は部分的にしか戦争に関わっておりません。それによって日本は第一次世界大戦のおかげで工業的に非常に発達し、ある意味では日本の社会にお金が回ってきたということ、そういうことが言えるかと思えます。工業が発達するということは、当然そこで働く人が増える、働く人が増えるということで当時、東京を中心にサラリーマン層というのが成立したのがやはりこの時代です。そういうことによって、これが郊外にそれほど広くはない、いまから見れば広いんですが、100坪から300坪ぐらい、宅地ですから広いんですけども、そういう土地を買って建物を建てたわけです。その建物は文化住宅というスタイルが好まれましたが、まあ洋風の生活を憧れたわけですね。さらにそこに洋風の庭をつくっていくということが、この時代から始まったということです。ですから、いまのイングリッシュガーデンの原点というのもここに出てまいります。

そのサラリーマン層、社会のなかで中間階層が大きく数を増していくということ、これはある意味では東京というなかに都市文化、あるいは大衆文化というものが生まれるということの契機となります。それまで、一部富裕層が独占的に持っていた文化的な要素が、第一次世界大戦が終わるとともに中間層にも広がっていきます。これは日本だけではなくて、世界的にこの中間層の人たちが都市のなかで新しい文化をつくり始めます。これはまたあとでちょっとお話しますが、そういうことで、都市を基盤とする大衆社会が成立をする。それによって映画、演劇、文学、美術、建築、こういう様々なジャンルで新しい動きが起きてくるということになるわけです。先ほど申し上げた第一次世界大戦のあと、世界の中の情報の流通、あるいは人の行き来、そういうことがそれ以前と比べると早くなっている。ですからたとえば、東京にいながらベルリンの情報、あるいはパリの情報、あるいはロンドンの情報、ニューヨークの情報というのが非常に早く入るようになった。そういう世界的な情報が共有されるような、あるいは共振されるような、そういう文化状況というのはこの時代から始まったということですね。

まさにこういう社会の基盤があって、ほかのジャンルと共に、庭という、そういう空間もデザインをしていくということができてまいります。この辺はまたあとでお話しますが、実はこの1920年代という年代を、われわれ以外の、たとえば先ほど申し上げたように、文学、映画、音楽、あるいは美術、建築、そういう分野では、実は1980年代に一度見

直しをしています。1980年代に20年代論というのが盛んに行なわれました。何冊も本が出、雑誌でも特集は組まれる、そういう様々なジャンルのなかで、1920年代というのは、現在の直接の原点というとらえ方をしているわけです。このあたり実は造園、あるいはそのガーデンという世界においては、そういう歴史的な評価というのをほとんどしてこなかったわけですね。ですからわれわれは近代の庭の歴史というものに対して、ほとんど無知であったといってもいいかもしれません。

たとえばいくつかご紹介しますが、1983年に、もうすでになくなってしまいましたけれども、「朝日ジャーナル」という雑誌がありました。この「朝日ジャーナル」が『光芒の1920年代』という本を出しました。これは日本のことは一部しか書いてないんですが、ベルリン、モスクワ、パリ、ニューヨーク、そして東京ということで国ではなくて都市について書いています。このなかで20年代として取り上げられているのが映画、演劇、音楽、美術、建築、文学です。この本の表紙、本のカバーにですね、実に刺激的な言葉が書いてあります。「現代は20年代の模倣に過ぎない」というコピーです。だからこの時代、1980年代ですね、その時代それぞれの分野において20年代は、まさに原点といいますか、それが20年代にあったということをおいわんとしているということだと思います。こういうほかのジャンルにとって、1920年代というのはそれほど重要な年代である、時代であったということは、もう常識だったわけですね。そういう意味でいえばわれわれは更に20年遅れでそこによりやく追いつこうかということになるのかもしれない。

これはまた別の本です。これも出版されたのは1983年ですけども、海野弘さんという評論家の方がいるんですが、この方は「モダン都市東京」という本を書いているんですね。これは文学について書いています。たとえば、その一節を紹介すると、「私は20年代を現代都市生活の成立した時代と考えている。そして欧米の20年代においてはすべての芸術がジャンルを超えて交流しあっていた。文学、美術、演劇、音楽、建築、映画、風俗、などは互いに絡み合っている。したがって一つのジャンルだけを孤立して扱っただけではこの時代の目まぐるしい状況を十分にとらえることはできない」というふうに書いてあります。この海野さんの書かれたことというのは、まさに庭、ガーデンにとってもまったく同じだと思います。やはりその時代の社会的な状況、あるいは建築との関わり、あるいは椅子式という新しい生活のスタイルが始まった時代でもあるわけですから、当然インテリアとか家具というものとの関連もあります。あるいは子供室という独立した部屋がこの時代からつくられているわけですけども、こういうことは実は庭のなかにも影響を及ぼしていたわけですね。これはどういうことかといいますと、それまでの庭がいわゆる伝統的な築山泉水というスタイルを持っていました。ここでは子供は遊べないわけです。この時代は子供の発見の時代というような言い方もあります。ということは生活のなかで子供の存在というのが非常に重要になってきた。その子供が外で、庭で遊べるかどうかということがやはり問題になってくるわけですね。そうやってきたときに、実はいままでの

築山泉水というそういう庭のスタイルでいいのかという見直しも当然出てきます。ですから、ここで海野さんがいうように、様々に関連しているジャンルそういうものをわれわれが理解しながら、庭についても考えていかない限り、これは20年代だけの問題ではなくて、これから21世紀に新しいスタイルを、つくり上げるとすれば、やはり現代という時代のなかで、隣接する様々なジャンルについても十分な知識、理解というのをしていかないと、新しいスタイルを生み出すということはどうていできないだろうと、そういうことにも繋がっていきます。まず、東京の1920年代という時代がそのような時代であって、非常に多くの分野から注目されている、そういう時代であったということをまずご理解をいただければというふうに思います。

レジメの二番めとしまして、イングリッシュガーデンをモデルとした洋風の庭という表題が上げております。いま申し上げたように、1920年代というのが日本の社会だけではなくて、個人の生活空間も大きく変えていったということがあるわけですね。どのように変わったかということ、これを一言で言えば生活の洋風化ということになります。きょうおいでいただいている方のなかに建築家の方も何人かいらっしゃると思いますので、そういう方は洋風化ということをよくご理解されていると思うのですが、これは、室内においてもやはり生活をしやすい環境をつくるということがテーマですね。実はここにもありますように、1920年、文部省の社会局が『生活改善同盟』という団体をつくりました。このなかには自由学園の羽仁もと子さんなんかも入っていらっしゃるわけですが、この生活改善同盟という団体が、どういうふうに生活を変えるかというような具体的なアピールを出しています。建築に関してはいま申し上げたように洋風化ということですが、より具体的にいえば畳に座るという生活から椅子式にするということが一つありますね。それから食事についても洋食、当時洋食というのはまだ珍しかったわけですが、この時代の洋食、トンカツ、コロッケ、カレーライスと、この三つがその時代の三大洋食というふうにいわれていますね。こういうものがやはり一般の生活のなかで食べられるようになってきたというのが、一つの典型的な例ですね。衣食住ということ言えば、着るものでいえば、特に女性が着物から洋服に着替えてきた。これはこの時代の一つのキーワードですが、職業婦人という言葉がこの時代に出てきます。これは仕事につく女性が増えてきたということになるわけですが、この洋服に着替えてくるということも一つの大きな変化ですね。衣食住ということでワンセットが洋風化していくと、庭も洋風化せざるを得ないということになっていきます。そのような時期に生活改善同盟から、生活改善のための意見書というのが出ています。ちょっと読んでみますね。一番目に、「庭園は建物まわりの空地として、採光、通風、防火、排水、空気の浄化等の機能を持つ。」これはいまでも当たり前といえば当たり前です。二番目が「使い勝手を良くする。」機能的であるべきだということでしょうね。三番目に「屋外の居室として利用する。」これはいまでもわれわれガーデンデザインをしていくなかで、屋外をアウトドアライフというような、あるいは屋外の部屋というとらえ方でいまでもやっておりますね。それから四番目に「野菜や

草花、果樹の栽培や家畜の飼育など趣味と実益と衛生上の効果を考えて、経済的な利用をはかる。」これも結構皆さん果実を植えたり、野菜を植えたり、ハーブを植えたり、いま盛んにやられているということでもわかると思います。五番目ですね「前庭の一部は、街路からも見られるようにし、街路の装飾として街路の美観を高めるようにする。」これは先ほどちょっと申し上げたような街並みの景観ということになりますよね。この時代に既にそういう街並み景観に配慮して一戸一戸の住宅の庭をつくりなさいということがいわれているわけです。で、六番目、「できるだけ広い芝生を設ける。」これは先ほど子供の話に関連して申し上げたような、子供が遊ぶための空間として広い芝生というのは必要だよと、そういうことになると思います。そして七番目に、「植栽は眺めるだけではなく、落葉樹を植えて緑陰をつくる。」そして八番目ですけれども、「築山泉水や石組みの代わりに、ベンチ、ガゼボ、アーチ、パーゴラを設けて、余裕があれば噴水、花壇等も設ける。」こう読んできますと、やはり皆さんのなかになんだ、いまやっていることと一緒にじゃないというふうな感想を持つ方もいるんじゃないかと思うんです。そうなんです。先ほどの本の紹介に、表紙のカバーに書いてある文句がここで甦ってくるんじゃないかと思うのです。「ようは現代は20年代の模倣に過ぎない」という刺激的な言葉ですけれども、まあこれを言い替えば、じゃあこの80年間何をしてたんだということにもなるわけですけれども、それは残念ながら第二次世界大戦というものがあって、それによってこのような流れはやはり中断してしまったということはあるかと思えます。

こうした庭園の改善、洋風化、ということは観賞を中心とした庭ではなくて、生活の環境を整えてアウトドアリビングやガーデニングを楽しむそういう庭をめざしていたとみることができます。この時代ガーデニングという言葉を使っていませんけれども、草花だとか、野菜だとか、果樹だとかといってみればガーデニングですわね。ようは自分で育てて、栽培して、そして収穫して楽しむ、そういうことをいえばまさにガーデニングそのものといってもいいんじゃないかと思えますね。

で、一番最後にガゼボだとかベンチだとかということが出てきましたね。実はこれちょっと言葉を言い換えています。実は漢字で例えば緑亭だとか、あるいは腰掛だとかという言葉を使いやすくいま風に替えていますけれども、意味するもの自体はまさにこの通りですね。そういうことをしてみると、イングリッシュガーデン風のデザインで当時つくられていたのじゃないかということが見えてきます。この辺はあとでまたちょっと図面を見ながら詳しくお話をいたしますが、それから街路からの視線にも配慮するということがあられるわけですね。これはですね、生活改善同盟というところが、こういう提案をした。この一番大事なポイントは何かというと、やはりそれまでの日本の庭の空間、これはまさに観賞ということだったわけですけれども、そういうものではなくて、ある意味では家族の生活のために楽しむための空間、生活のための空間というように新しく庭を捉え直した、これは非常に大きいことです。そういう基本的なコンセプトがあるからこそ、具体的に個々のいろんなデザインというのが生きてくるわけですね。ここで、日本庭園というものが実

は行き詰まっていたということが逆に言えると思います。これはまたあとで話が出ますけれども、逆に行き詰まっていたからこそ、日本庭園のなかでまさに新しい日本庭園のスタイルという雑木の庭が出てきたということが逆にいえますね。そういうこの時代の庭の状況というのが、逆にこういう言葉から読み取るということも可能になると思います。『実用主義の庭園』という本があります。田村剛さんが1919年に出版された本ですが、田村さんは生活改善同盟の委員にもなっていて、生活改善同盟の意見書とほぼ同じ内容が書かれています。まさにいまのガーデンの発祥となった本ではないだろうかというふうに思っています。『実用主義の庭園』には、当時現役で活躍していたイギリスの[ガートルード・ジェキル氏の庭園の写真](#)、イギリスの庭について興味を持っている人だったら、この名前はピンとくると思いますけれども、彼女が亡くなったのが1932年ぐらいだったと思いますが、ですからまだ現役で活躍していたと思います。これが実は『実用主義の庭園』に紹介されている写真です。ここではジェキル氏というような説明ですね。田村さんは当然このジェキルさんの庭を見たか、あるいは写真を撮ったか、はっきりとはしませんが、こういう庭を見て帰ってきているわけです。それ以外にも田村さんの本のなかには、ドイツのクラインガルテンという要素も出てまいります。それから、アメリカの庭の話、ある意味では当時の世界各地の庭を見て歩いて、帰ってきて、そしてこの『実用主義の庭園』という本をつくったのではないだろうかというふうに思っております。

三番目にいきます。三番目では「新しい日本庭園－雑木の庭」という表題をつけております。これ先ほど申しましたように、当時の日本庭園というのが江戸以来のスタイルをずっと守ってきたわけですね。江戸時代に出た、庭の造り方のテキストといえますか、ネタ本になった『築山庭造伝』という本がありますが、こういう本にならってずっとつくられ続けてきた庭が、まさに1920年代、もう時代に合わないということが気づかれ始めた。そういうなかである部分は洋風へいったわけです。そして、ある部分は和風の新しい流れに入っていきます。これが、伝統的な築山泉水の庭や京都風のつくり庭から離れて、武蔵野の雑木林をイメージする自然風な雑木の庭を[飯田十基](#)さんという方がつくったということですね。面白いのは、先ほどほかのジャンルとの関連ということがありますが、実はここでも非常に文学というものと関連というものが出てまいります。これは例えば日本の歴史のなかで、雑木という、ようはクヌギとかコナラとか、エゴとかという樹木が、造園の歴史だけではなくて、美術なり、文学でもそうですけれども、ほかの分野でほとんど名前が出てきません。あるいは文様というような形でも表現されておられません。まったく無視されてきたのがこの雑木です。この雑木を評価したのが国木田独歩の『武蔵野』というふうに言われているわけですが、これもロシア文学の影響があるということですね。先ほど申し上げたように、日本で起こった新しい庭というのものも、世界的な一つの流れ、これが文学である場合もあるかもしれませんし、美術であるかもしれません。そういう関連のなかで物事が起こってくる。あるいは変わってくるということがここでも言えると思います。これは建築でいえばこの時代、のちに非常に高名な建築家になっていき



ますけれども、堀口捨巳さん、あるいは谷口さん、あるいは吉田さん、村野さん、こういう方々が茶室の研究を行い、あるいはその日本の数寄屋造りをいかに現代風にするかということで様々な試みをしております。そういう中からやがて新しい近代数寄屋というものができてきます。それに対応する形で新しい庭というのもどうしてもこれは必要になってきますね。こういう関わりの部分、これはなかなか一般的に一つの分野の本だけでは見えてこないわけですが、こういうあたりのお互いの関連性というのは実は一番大事なところになってくるのではないかと思います。

次に、ここでは先ほどもちょっと触れました、数寄屋の建築、あるいは数寄屋の庭園というのが成り立つためには、お茶というものがなければまったく意味を持たないわけです。お茶というのは皆さんもご存知のように、ある意味では日本の総合的な文化ですね。建築から庭から、それから絵画、書、陶芸、漆器、料理、すべてにわたるものが総合されてお茶という文化として作り上げております。この時代、先ほどもちょっと申し上げたように財界を中心としたお茶の文化というものが非常に盛んになる。これは財界だけではなく、広く社会にも広がっていったお茶の文化、これが背景にあるからこそこの時代新しい数寄屋というものも成り立ったということがいえるんじゃないかということがありますね。

四番目に、「郊外住宅地の庭」ということです。東京は先ほど申し上げたようにサラリーマン層が増えました。結果的に住宅が不足してくる。当時市電、東京市内はほとんど市電が中心になったわけですが、このチンチン電車も満員で乗れないというような状況が続きました。まさにいまのラッシュアワーそのものですね。ですからそういう都市の様相そのものが、いまと同じような状況がこの20年代に起きていたということですね。1923年には関東大震災が起きます。結果的には関東大震災後に郊外住宅地というのが続々とできていくわけですが、典型的なところで言えば、田園調布、あるいは成城、国立、そういったところが続くわけですが、これはまあ、またあとでまた藤谷先生にお話いただくわけですが、先ほどもお話ししたように、郊外に行って計画的につくられた街、ある意味では昔の城下町とかはありますけれども、そうではなくて、近代に生活の場として、住む場所として新しくつくられたということ、これの経験というのは当時ほとんどなかったわけですね。田園調布をつくった渋沢秀雄さんがイギリスのレッチワースへ行ったり、アメリカに渡って、アメリカのセント・フランシス・ウッドの街を見るといなかで、まさにニュータウンの構想をつくっていくわけですね。そういう計画的な街のなかで、当時の東京の市内ともっとも違うこと、あるいはそういうところに住みたいという人がもっとも望んだことというのは、一つはやはり安全ですね。これは関東大震災という経験を経ていますから、安全ということは非常に重要視します。それから空気がきれいである。健康的な生活ができるということです。これも当時は東京市内に工場が立地していました。ですから空気は非常に汚れていた。逆にいうとこれはかつてのイングリッシュガーデンが生まれる前のロンドンの状況に近いわけですが、そういうような状況で郊外に住む人が増えた。そこで庭というのはもちろん先ほど申し上げたように、和風

の庭、あるいはイングリッシュガーデン風の洋風の庭というのはもちろんあるんですけども、そうではなくて、街の顔としての庭、道路沿いのフロントガーデンといいますかね、こういう新しい場所ですよ、新しい場所の新しい庭のあり方というのがやはりこのときに生まれています。実際現代の私自身も新しい街づくりというなかで、建売住宅ですとか、そういうところの街並みの景観計画をいたします。やはりその原点というのはやはりここにくるわけですね。そういう意味では非常に1920年代というのがきわめて重要な時代であったということをまずご理解をしていただいて、次回からのここのテーマに少し深く入り込んだ話を聞いていただけるとありがたいと思います。

これからちょっと皆さんにスライドを見ていただきますが、白黒ということで見づらい点もあるかと思いますが、少し見ながらお話を続けていきたいと思っています。

最初に出ましたこの図面ですけれども(図-1)、これは先ほど紹介した1919年に出版された田村さんの『実用主義の庭園』、このなかに収録されている図面です。先ほどはガートロード・ジーキルさんの写真が出てきましたけれども、ここではハンペル氏原図ということで書いてあります。このハンペルさんという人はドイツのデザイナーのようですね。その人の図面でこういうような庭園の図面が載せられております。この『実用主義の庭園』というのはですね、日本庭園を否定して、例えば造型的には、あるいはデザイン的には直線、直角、円、これを使ってようはデザインをする。それから使う植物も果樹だとか、あるいは草花だとか、野菜だとかというものを使っていく、そういう徹底した実用主義に徹した内容です。このなかには当然イングリッシュガーデンの情報も入り、一部ドイツのクラインガルテンの情報も入っているかと思っています。そういうことで見ていただくと、この図面の全体の構成、直線と円、これで構成されている、これをどうして載せたかというのがよくわかるんじゃないかと思っています。

これも似たような構成の図面(図-2)ですね。これはアメリカのデザイナーの図面です。先ほど申し上げたように、田村さんはイギリスだけではなくて、様々な国を回ってこういう庭の情報を集めてきて本を書いたということですね。

これはですね(図-3)、先ほど申し上げた生活改善同盟が具体的にこういう建物、間取りですね、あるいはこういう庭をつくりなさいと、言ってみれば一つのモデルです。例えば当時の和風の住宅からガラッと変わって、まあ全体が洋風の間取りになっています。その当時建築家の方がいるなかで話すのは恥ずかしいのですけれども、中廊下式というような住宅の様式が多かったわけですね。これは江戸の下級武士の住まいをずっと引いてきている、そういう様式だったわけですが、それがガラッと変わっています。一番いい場所に居間というのができてきますね。ある意味では水回りの改善というのも建築では重要な要素だったわけです。そして、建物と庭を繋ぐための空間、テラスという空間が非常に重要視されています。テラスの正面、居間から見ればまさに正面ですけども、壁泉があります。小さく睡蓮と書いてあるのですけれどもね。壁泉を中心として左右にそれぞれの要素を振り分けていますね。こちらにはパーゴラ、ここはアーチになっていますね。こちら

のほうは蔬菜園、それから物干し場。ようは整型式な庭園のなかに新しい洋風のイメージを盛り込んでいると思います。

これがパース [\(図- 4\)](#) ですね。建物がありまして、テラスにもパーゴラがありますね。この両側が芝生です。ここに緑陰樹があるわけですね。門は石張りのような門がつくられています。奥のほうに物干し場がありますね。ここは菜園、ここにアーチがあつて庭の私邸とある意味ではバックヤードとの境界をつくっているという形ですね。これが生活改善同盟というところを出した新しい生活をするための庭園のモデルですね。次にに出しましたのは [\(図- 5\)](#)、実は田村さん自身が当時の状況のなかで、ようは当時の状況というのは建物はまだ和風の建物ではあるけれども、例えば庭を変えたとしたらこういうふうに変えたらどうだろうという提案です。門があつて玄関ですね、ここにあるのが灯籠です。客間があつて、茶の間、居間ということで庭に面していますね。先ほどは壁泉がありましたけれども、壁泉に相当するフォーカルポイントというのがこの「り」という腰掛け、木造というふうに書いてあります。木のベンチになると思いますね。この両脇に「ぬ」ですから、鉢台ですね。鉢台があつて当然花鉢が飾られている。この両側に花壇、いってみればボーダー花壇ということになると思います。そして鉢が飾られていて、こちらには生け垣があります。たとえばこの「た」四つ目垣にバラ等と書いてあります。「れ」こちら垣根仕立ての果物、梨とかブドウというふうに書いてありますね。野菜が植わったり、果樹が植わったり、こちらはまあ菜園になっています。ここに「る」というのがありますね。緑庭、美男葛、藤、ブドウ、庭園工作物としてアーボアとか、あるいはガゼボというような、そういうものになるのだと思います。これを全体として見たときに、皆さんイングリッシュガーデンの庭園の作り方だということがおわかりになるのじゃないかと思うのですよね。真ん中は広い芝生なになっています。この「わ」というのが緑陰樹、ここではトチノ木ということになっていますね。先ほどの住宅改善同盟のモデルプランから見ると、もう少し実際的といいますか、あそこまで作り込みはしていないわけですが、基本的なものの考え方というのはかなり共通しているというのが読み取れるのじゃないかと思います。

たとえばそういうようななかで、郊外住宅地の代表として例えば田園調布というのがありますね。この田園調布、どんな家が建っていたか、あるいは門回りはどういう形だったかというのをちょっと見たいと思います。 [\(図- 6\)](#) 見てみますと非常に洋館が多いですね。この田園調布の街並みですが、当時住民の間で紳士協定として、ある条件が決められています。このなかで、道路からの離れというのはもちろんあるのですけれども、土留めといいますか、道路の縁石といいますか、それも大谷石でできています。これも実は曲線なのですね。非常にある意味では手の込んだ作りをしています。この道路面から完全に庭のなかを隠すということをしなない。ようは高い塀を設けないということが街並みづくりの条件になっています。腰壁程度の土留め、その上にさらに斜面がある場合は芝土手ですよ。あるいはその上に樹木を植えて植栽をする。ですから、あまり閉鎖的にはしない。庭のなかの様子がなんとなくかえらるという程度の、道路沿いの作りをしなさいとい

うのが決まっています。田園調布では、田園調布会という財団法人の住民の団体があります。そこはずっとこういう街づくりの決め事があって、これらを守ってきているというふうに言われておりますけれども、そのもともとの姿というのはこういう状態です。ですから、ここで多少フェンス状のものがあったとしてもあまり高くなくて、ある程度庭のなかの様子が見えてくる。これは道路景観や街並に対しても非常に重要な役割ですね。いま残っているのは数軒程度しかないようですけれども。

これは当時の洋風の住宅です（図- 7）、洋風の庭がつくられたという話を先ほどしていたわけですが、これはあとで内田先生が話されるんじゃないかと思いますが、アメリカの影響ですね、ここにもアメリカ屋という名前が出てきています。建築部材の輸入販売や住宅の設計を行なって、アメリカ風の住宅を広めたという会社です。アメリカ屋でつくった住宅ですね。ここではほんとに低い生け垣程度の外囲いです。こちらはやや本格的な建物ですが、先ほどあったように広い芝生があって、緑陰樹があって、というような考え方にはなんとなく近いものがあると思います。ここには小さいですがシュロが植わっているわけですね。この時代洋風の建物に合わせる樹木としては、まず第一にシュロ、そしてヒマラヤスギ、これが必ずといっていいほど出てきます。

これも洋風住宅の一例ですね。これは階段でテラスという形で大きくつくるのではなくて、このなかが参道的な環境のようですね。そこから庭に降りてくるという感じになっています。下の図面を見ますと、ちょっと変形ではありますが、整形式の花壇があり、脇には畑があるということで、このあたりにも先ほどのある意味では住宅改善同盟、あるいは田村さんの本の影響というのが伺えるのではないかと思います。

これも洋風住宅の一例ですね。レンガ積み門柱があって、上に照明が乗っかっている。フェンスがあって、アーチがあって、庭とアプローチを仕切っている。いまでもありそうなそんな構成ですね。

先ほど田園調布のところでもお話しましたように、この時代大谷石という石材というのは非常に多く使われています。いわゆる土木資材としてももちろんですが、造園資材としてもやはり重要ですね。ライトが帝国ホテルで使って以来、非常にこの大谷石というのは有名になったわけですが、ここでも大谷石を方形乱張りという形でしょうね、使っていますね。ここでもおそらく応接室の前にシュロの木が植わって、このあたりにもはっきりしませんけれども針葉樹が植わっているという状態です。

これはスパニッシュというスタイルですね（図- 8）。ここではドラセナが使われていますね。こちらはユッカでしょうか。いまでもやはりスペイン風、あるいはイタリア風というようによく使われますよね。

次にこれはですね、1920年代の最後、終わりになりますけれども、1929年に当時朝日新聞で住宅のプランを募集しました。これは当時朝日新聞、あるいはその報知新聞という各誌が競って新しい住宅のプラン集を、いまでいうコンペみたいな形で集めています。そのなかで入選したものを、『朝日住宅図案集』という本にまとめられておりま

す。昭和4年です。1929年ですね。この時代、実はいままで庭の話をしてきたわけですが、逆に建築家のほうが庭に関してある程度関心を持ち始めているところをちょっと見ていきたいと思います。これはあくまで建築家の建築のプラン集ですね。そのなかで、2割ぐらいでしょうかね、庭に関しても図面を書いて提出をしています。そのなかのいくつかを紹介したいと思いますけれども。ここは真ん中に居間ということで、ここは8畳、ここは和室ですね。こちらに子供室があります。こちらには書斎ということですかね。この子供室、居間、書斎を繋ぐためのここでは縁側と書いてあります。いまでいうデッキに相当するのでしょうか。庭のほうは整型式の花壇があって、この二つは花、この二つは畑と書いてあります。こちらに円形の池が、こちらは芝生、そして植え込みということになりますね。この書斎というのは応接室をかねていることが多かったものですから、応接間だけ洋風というつくりも多く見られます。その応接間の出窓の周辺、ここに植栽がありますね。実際この図面ではどうかかわからないのですが、たとえば小説家の大岡昇平さんという方がいます。この方が『少年』という自分の子供のころのことを書いた本がありまして、渋谷の松濤のあたり、そこにお父さんが建売住宅を買って住んでいる、そういう思いつきが出てきます。同じようにこの応接間のところだけが洋間になっていて、その応接間の窓の外にはバラが植えてあったという記述がありますね。ですから、応接間の前には多少そういう洋風の匂いのする植栽、あるいは花というのが使われていたということは十分可能性はありますね。

やはり建築家の方が庭をプランニングしていくなかで、やはり一番重要視するのは庭と建物の内部のつながりの部分ではないかと思います(図-9)。そういうところでどうしてもこういうテラスという空間が出てくることが多いわけですが、ここでもテラスがあって、ここに半円形の池がありますね。庭に出ると砂場があり、花壇があり、ここは花壇が三つあります。あとは芝生、ここにブランコがありますね。ここにもやはり子供室というのが出てきます。庭に出やすい位置、南の非常に日当たりのいい場所、こういうところに子供室というのがよく当時よくつくられたようです。これは先ほども申し上げたように、庭に出て遊ぶということを前提にしているわけですね。そのためにテラス、そして芝生、さらに砂場、ブランコという子供の遊びの要素というのが設定されている。

これも同じ朝日住宅図案集のなかの一つです(図-10)。ここでもやはりテラス、テラスを中心に居間、食堂、子供室というふうにつながっていますね。テラスのところに正面フォーカルポイントになるところに小さな池があるということは共通しています。

ここでもやはり砂場、ブランコ、そして池、(図-11) そういうような子供が遊ぶ要素を随分この当時の建築家が提案をしていたということがよくわかると思うのですが、先ほどちょっとお話した、この時代子供の発見の時代というふうに言われています。これはたとえば童謡、あるいは絵本、それから子供のおもちゃもそうですけれども、こういうものが非常に発達をした、そういう時代です。ですから子供がいままで生活空間のなかで重要視されていなかった時代、そういう時代からやはり子供を中心とした一つの家族中心の生

活空間、そういうものが建築のプランにしても、庭のプランにしても出てきているのじゃないかというふうに思います。

ここではちょっと時代が下がってきます。1930年代に入ってきますね。この辺は建築家の方にとってはおなじみの写真だと思いますが、堀口捨巳さんのこれは作品ですね。堀口さんは非常に日本の茶室の研究というのをされていて、茶室の本も何冊も出されています。そういうなかで現代的な解釈で一つの数寄屋をつくってきたということが言えるわけですが、こういう直角の構成の池に柱を立てて、池の中に柱を立てる、こちらは月見台ですね。自然石を置いてそこに柱を立てる、非常に和風的な要素と、それから現代的な要素、これを非常にうまく融合させているということが言えるかと思います。やはり先ほど申し上げたように、それまでの建物、それまでの庭、あるいはそれまでの生活というものを当時の20年代の人たちというのは、どうやって変えていくかということである意味では格闘していたわけです。堀口さんもそういう中の一人になるということですね。下はこれは堀口さんの作品ではないのですけれども（図-12）、いってみればいまのコニファーを使った植栽ですね。ヒマラヤ杉がこう入り口の両側にあります。おそらくこの並んでいるのは、ヒバかサワラかそんなところでしょうかね。

これはまた、堀口さんの庭（図-13）、ちょっと別な角度から見たところですね。お得意の竹でつくった月見台です。非常にきれいですね。この飛び石の打ち方、これはまさに茶室、茶庭の研究から出てきたものですが、それを数寄屋というなかに伸びやかに表現しているということが言えます。下はこれも非常に建築の方にとってはよくご存知の建物の庭ですね。これはインターナショナルスタイルということになってくると思います。先ほど申し上げたようにですね、第一次世界大戦のあと、世界的に国境を越えて情報、あるいは知識、文化というものが共振をしてくれているわけです。そういうなかで建築の世界でもやはりインターナショナルスタイルという、そういうスタイルも生まれてきているわけですね。これもその一つで、ある意味でいえば非常に古典的な素材、円形の花壇、あるいはカナルという、これはヨーロッパの庭の要素ですね。それを現代的なインターナショナルスタイルのなかにうまく消化してくる。ですから先ほどは茶室という日本的なスタイルというものをどう現代化するかということだったわけですが、ここでは逆にインターナショナルスタイルというところに伝統的なヨーロッパの庭園の一部の要素をうまく溶かし込んできているということが言えると思います。この周辺の芝生のつくり方、あるいはまわりの植栽ですね、自然風景式庭園のつくり方の一部が見えているような気がします。

次に、これは昭和14年、1939年に日本電建で出した写真集の一部です、日本電建という会社はこの当時盛んに注文建築をつくっていました。ですから戦争に突入する直前という時代です。ここに選んでおりますのはほとんどが東京の郊外、いまは23区内に入ってますけれども、当時でいえば東京市の外側ですね。例えば荏原郡であるとか、豊多摩郡であるとか、まだその郡部であるということです。東京の周辺部ということで見えてい

ただければと思います。ですからやや郊外の気分があるということです。郊外の住宅でよく共通的につくられたのが生け垣です。東京市内ということになりますと、たとえばこういう当時万年塀というのが出始めています。あるいはこの板塀ですね。そういうものが多いわけですが、郊外に行きますと生け垣というのが主流になってきます。この門柱と、門扉のデザインというのは結構頑張ってデザインしていると思いますよ。当時は既製品がないのですから、すべてオリジナルでしかないわけですね。

これはまさにちよつとこう粋なお姉さんでも出てきそうなそういう建物の外観ですが、やはり東京の郊外はこういう竹垣というのも多くつくられておりました。杉皮を張った屋根をつけた門ということで、これもなんか懐かしいような姿ですね。下の写真、これも先ほどと同じように、道路沿いは生け垣でつくっているわけです。ちよつと門柱を見ていただきたいのですが、これは丸太を立てたような格好、おわかりになります。実はこれ疑木なのです。20年代、30年代のなかに門柱として疑木を使っているという例が、数は少ないけれどもあります。当時、疑木というのはまだ目新しい素材です。コンクリート製の疑木ですよ。ちよつとそういう意味では面白い素材を門柱に使っております。

これは現代です。突然カラーになりました。これはですね、私自身がこの1920年代、30年代ということに興味を持ち出してからだいぶたちますけれども、その過程で世田谷、目黒、杉並、そのあたり時代からいけばまさに郊外ですわね。その時代の郊外の住宅地を街歩きをするのが趣味だったわけです。そのなかで外構、あるいは門回り、これを写真に撮って歩いたものの一つです。これはですね、実はなんでこういう写真を撮るしかないかといいますと、その時代の庭、実はほとんど残っていないんですよ。これは東京が戦災で焼け、そのあとの食料不足で庭がみんな掘り返されて、芋畑、カボチャ畑になっちゃいました。そういうなかで庭という空間がそのまま保存されているということは極めて珍しいのです。そういうなかでこの門回りだけは、残されてるということがあります。先ほど白黒の写真でも見ていただいたと思うんですが、こういう方形乱張りの門柱ですね。笠木、幅木はきちつとつくってあります。それで木でつくったデザインされた門扉。一番下はコンクリートのようですね。大谷石がありまして、ここまでが本来の造成の盤だと思えます。そこに玉石積みということになりますか、石組みをして生け垣をつくっていると。非常に正しい郊外住宅の門回りです。

これも目黒です。これは安山岩系、新小松の石のような気がしますが、それを積んで門柱にしていますね。上に照明が入るところを設けています。門扉はこれは鉄製ですね。いまでいうロートアイアンです。ちよつと塀が見えますけれども、これも石積みしてロートアイアンのフェンスですね。日常はこの脇門から出入りするという格好です。建物は正面はここにちよつと瓦屋根が見えています。和風の重厚なつくりの玄関ですが、脇に洋風の応接間というのがつくられています。これもまさに当時の郊外住宅の典型的なつくりです。

これもちよつと建物は見えませんが、同じように応接間が洋間であって、あとは

主屋は日本家屋というつくりですね。当時の文化住宅の典型です。ここではモルタルの塀になっています。門柱に関してはこのタイルはスクラッチタイルですね。帝国ホテルで使われたスクラッチタイルを貼っています。いま行ったらきれいに化粧しちゃっているので、タイルがみんな埋まっちゃっているのですけれどもね。

これが最後かな、これが最後の部分ですね。これもやや安山岩系の石で、門柱をつくって鉄で門扉をつくっているという例ですね。笠木もちょっとこっていますね。やはりこの時代というのはまさに既製品がない時代ですから、仮に建築の人が門回りまでデザインをするか、あるいは造園の人がデザインをするかどちらかですけれども、いってみればすべてオリジナルということですよ。そういうようなものがこの時代つくられていたということをお話にご紹介をするということで、とりあえずお話は終わりにさせていただきます。

司会 ありがとうございました。(拍手)